

訳者あとがき

本書は、ディン・キム・フック著『ホアンサ・チュオンサ－論拠と事実－』（時代出版社、2011年、ハノイ）の一部を除く全訳である。一部を除くという理由は、後述する。

ディン・キム・フック氏は、1959年1月5日生まれで、ヴィンロン省出身であり、1984年にカントー大学歴史地理学師範大学を卒業し、1988年にハノイ師範大学大学院歴史教育専攻を卒業している。現在ホーチミン市オープン大学の開発研究センターの研究員で、アセアンにおける国際問題の専門家と位置づけられている。本書以外に、2014年に作家協会出版社より『古代のホアンサ・チュオンサ』を編集し出版している。

歴史地理学を専門とせず、南シナ海問題の専門家でもない訳者が本書を手がけることになったのは、以下の事情である。ナウカ社出身で日本の書籍とベトナムの書籍のエージェントであるビスタピー・エス社の酒井洋昌社長から依頼され、止むを得ず引き受けることになったからであり、社長には、日頃翻訳仲介業務で多大な協力を得ていたからである。既に訳者が本書の翻訳を引き受けた時、60パーセント弱の下訳と言えるものがあり、監修プラス残りの訳出から始まった。しかし、最終的に訳者が最初から全ページを訳し直した方が適切であると判断され、昨年暮れより翻訳作業が始まったのである。

それでは、「一部を除く全訳」の一部について説明しておこう。本書には当初、付論の一部として「東海の諸問題－いかなる二国間の解決策でも、失敗する－」が含まれており、2011年6月10日に行った読売新聞のベトナム人記者（ゲン・ヴァン・タン）とのインタビューが掲載されていた。しかし、このインタビューが、新聞紙上に掲載されたかどうかは確認が取れなかった。その記者の所在も8年も前のことで不明であった。そのため、東京の読売新聞本社に転載の許諾を求めたものの、以下の理由から承諾を得られなかったのである。第1に出典が不明であること、第2に読売新聞の記者がインタビューしたという確証がないこと、第3としてその模様を書籍などに転載することを許諾していない可能性がある、ということからである。

ただ訳者の責任で、本書の他の部分と異なる点を示すならば、以下の指摘で

あり、南シナ海紛争がさらに深刻化を予想するインタビューであった。

『読売新聞』：貴方は、ベトナム軍が、将来の石油・ガス開発だけではなく、海上で漁民を守ることが可能だと見なしていますか。

ディン・キム・フック：ベトナム領海内の海上での漁民保護と石油・ガスの探索活動は、国の神聖な活動です。中国側が漁民を拿捕するという暴力を使用し、ベトナムが多年にわたって実施してきた正常な石油・ガスの探索と開発活動を弱体化するならば、ベトナムが軍事力を使用する可能性は、確かに決定的に「重要な」役割になるでしょう。

ベトナム軍は、ベトナム水域で合法的に稼働しているベトナム漁船と地震調査船を保護するため、中国がしばしば嫌がらせをする場所に、軍艦を派遣できます。最近のビンミン2号の際に中国船団の行為に対して実施したように、必要ならばベトナム領海内に侵入する中国船団を追跡し、または逮捕することも可能です」。

最後に、本書は学術的専門書という側面のみならず、このインタビューでも明白のように、きわめて論争的な書籍であり、率直にベトナムサイドからの南シナ海（東海）問題への鋭意な立場を読み取れよう。

2019年10月22日

橋本和孝